

学部・研究科等の研究に関する現況分析結果

- | | | |
|----|------------|--------|
| 1. | 美術学部・美術研究科 | 研究 1-1 |
| 2. | 音楽学部・音楽研究科 | 研究 2-1 |
| 3. | 映像研究科 | 研究 3-1 |

美術学部・美術研究科

I	研究水準	研究 1-2
II	質の向上度	研究 1-3

I 研究水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

1. 研究活動の状況

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

期待される水準を上回る

[判断理由]

「研究活動の実施状況」のうち、研究の実施状況については、平成 16 年 4 月～平成 19 年 5 月までの 3 年余りにおける個展等の開催は、教員一名当たり 8 件、著書・論文も一名当たり 3 件を越え、極めて活発である。研究資金の獲得状況については、科学研究費補助金の獲得金額で 10%、件数で 30%の伸びを示し、受託研究等についても、受託研究 59 件、共同研究 3 件、受託事業 18 件を数え、「上野タウンアートミュージアム」が特別教育研究経費の助成対象となることなどは、優れた成果である。

以上の点について、美術学部・美術研究科の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、研究活動の状況は、美術学部・美術研究科が想定している関係者の「期待される水準を上回る」と判断される。

上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、平成 16～19 年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第 1 期中期目標期間における判定として確定する。

2. 研究成果の状況

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

期待される水準を上回る

[判断理由]

「研究成果の状況」について、学術面では、様々な賞の受賞のほか、「ウェルジャリア」「日蝕 0 3 0 2」「ドイツ表現主義の彫刻家「エルンスト・バルラハ」展」「13 世紀～14 世紀の龍泉窯陶磁技法「青磁大皿」の復元的焼成研究」等が高く評価できる。また、社会、経済、文化面では、「アフガニスタン流失文化財の調査報告書」「岐阜県森林文化アカデミー」等の研究に加え、「取手アートプロジェクト」が地域社会への積極的貢献として評価できるこ

となどは、優れた成果である。

以上の点について、美術学部・美術研究科の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、研究成果の状況は、美術学部・美術研究科が想定している関係者の「期待される水準を上回る」と判断される。

上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、平成 16～19 年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第 1 期中期目標期間における判定として確定する。

II 質の向上度

1. 質の向上度

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

相応に改善、向上している

[判断理由]

「大きく改善、向上している」と判断された事例が 2 件、「相応に改善、向上している」と判断された事例が 1 件であった。

上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、平成 16～19 年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第 1 期中期目標期間終了時における判定として確定する。

音楽学部・音楽研究科

I	研究水準	研究 2-2
II	質の向上度	研究 2-3

I 研究水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

1. 研究活動の状況

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

期待される水準を上回る

[判断理由]

「研究活動の実施状況」のうち、研究の実施状況については、平成 16 年 4 月～平成 19 年 5 月までの 3 年余りにおける演奏会等の開催数は、教員一名当たり 30 件を超え、著書・論文数も 2.38 件となっている。研究資金の獲得状況については、科学研究費補助金の採択数も着実な伸びを示し、受託研究も増加していることなどは、優れた成果である。

以上の点について、音楽学部・音楽研究科の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、研究活動の状況は、音楽学部・音楽研究科が想定している関係者の「期待される水準を上回る」と判断される。

上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、平成 16～19 年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第 1 期中期目標期間における判定として確定する。

2. 研究成果の状況

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

期待される水準を上回る

[判断理由]

「研究成果の状況」について、学術面では、「J. S. バッハの教会カンタータ」や「オルフェウス」が高く評価できる。また 4 名の教員が国内外の賞を受賞している。社会、経済、文化面では、「取手アートプロジェクト」が地域社会への著しい貢献によって高く評価できることなどは、優れた成果である。

以上の点について、音楽学部・音楽研究科の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、研究成果の状況は、音楽学部・音楽研究科が想定している関係者の「期待される水準を上回る」と判断される。

上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、平成 16～19 年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第 1 期中期目標期間における判定として確定する。

II 質の向上度

1. 質の向上度

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

相応に改善、向上している

[判断理由]

「高い質（水準）を維持している」と判断された事例が 1 件、「相応に改善、向上している」と判断された事例が 1 件であった。

上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、平成 16～19 年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第 1 期中期目標期間終了時における判定として確定する。

映像研究科

I	研究水準	研究 3-2
II	質の向上度	研究 3-3

I 研究水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

1. 研究活動の状況

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

期待される水準を上回る

[判断理由]

「研究活動の実施状況」のうち、研究活動の実施状況については、多様な分野にわたる映像制作の特性を考慮した分野横断型のプロジェクト型研究を取り入れ、外部資金を導入した研究を 3 件行い、映像表現の可能性などについて先導的研究を行っていることは特筆すべきことである。研究資金の獲得状況については、平成 17 年度 3 件、平成 18 年度 6 件、平成 19 年度 8 件と実績を上げていることは、優れた成果である。

以上の点について、映像研究科の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、研究活動の状況は、映像研究科が想定している関係者の「期待される水準を上回る」と判断される。

上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、平成 16～19 年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第 1 期中期目標期間における判定として確定する。

2. 研究成果の状況

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

期待される水準を上回る

[判断理由]

「研究成果の状況」について、社会、経済、文化面では、卓越した業績として、「A-poc INSIDE」「殞の森」「トウキョウソナタ」が挙げられており、高く評価されている。また、それぞれ、ニューヨーク ADC 賞、カンヌ映画祭ではグランプリを受賞、同じくカンヌ映画祭で「ある視点・審査委員賞」を受賞していることなどは、優れた成果である。

以上の点について、映像研究科の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、研究成果の状況は、映像研究科が想定している関係者の「期待される水準を上回る」と判断さ

れる。

上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、平成 16～19 年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第 1 期中期目標期間における判定として確定する。

II 質の向上度

1. 質の向上度

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

相応に改善、向上している

[判断理由]

「大きく改善、向上している」と判断された事例が 1 件、「相応に改善、向上している」と判断された事例が 1 件であった。

上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、平成 16～19 年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第 1 期中期目標期間終了時における判定として確定する。